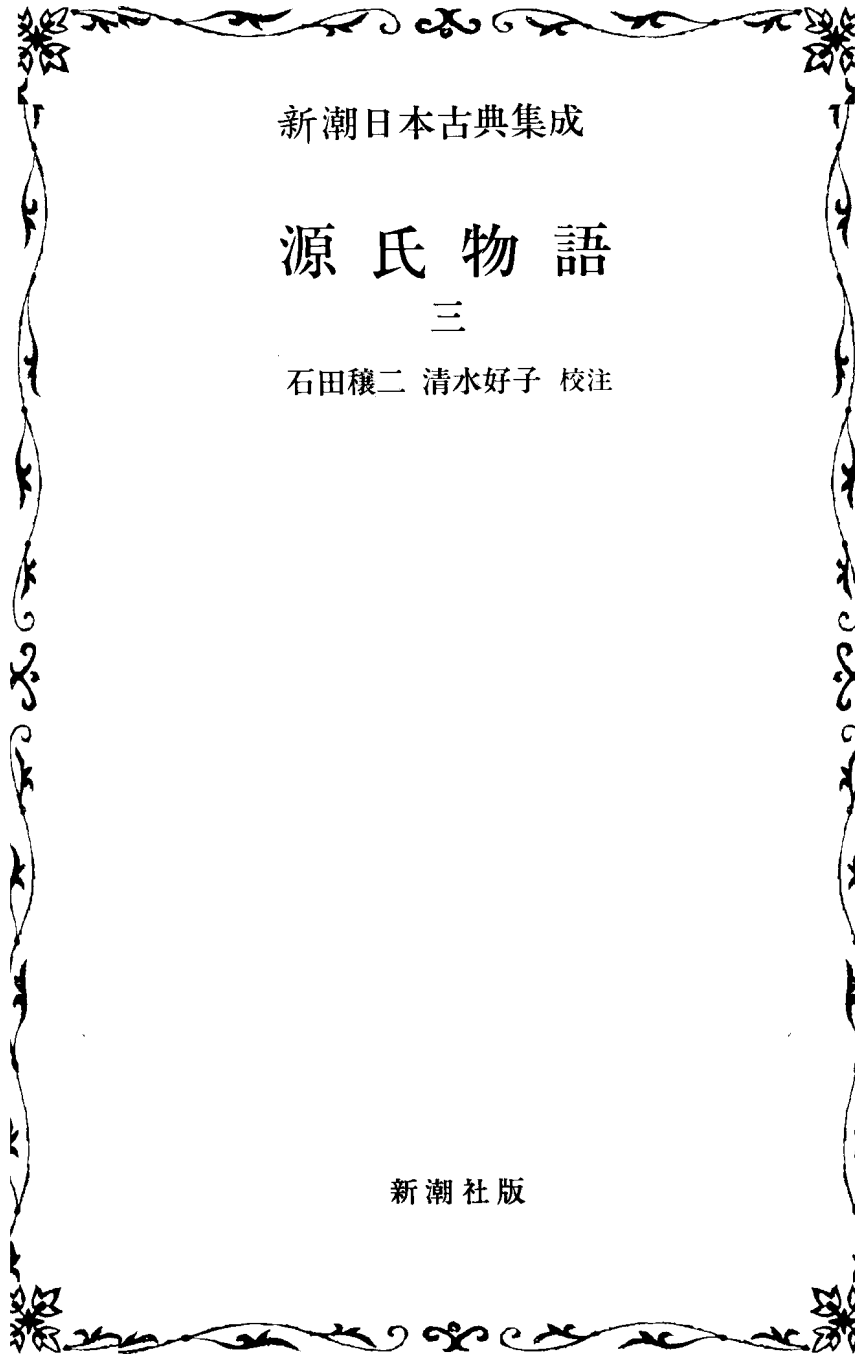


A decorative border with floral and scrollwork motifs surrounds the text.

新潮日本古典集成

源氏物語

三

石田穰二 清水好子 校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第一八回）

源氏物語三



定価一五〇〇円

昭和五十三年五月五日 印刷
昭和五十三年五月十日 発行

校注者 石田穰二

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 東京03(二六六)五一二(業務)
東京03(二六六)五四二(編集)
振替 東京 四一八〇八

装画 佐多芳郎
組版 シーティエス大日本
製本 新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

朝	薄	松	絵	関	蓬	濤	凡
顔	雲	風	合	屋	生	標	例
.....							
一六七	一四七	一二七	九	三	五	九	三

少

女

.....三五

玉

鬢

.....二九

付

録

天德四年内裏歌合

.....三三

系

図

.....三八

図

録

.....三一

凡 例

一、本巻には、濤標、蓬生、関屋、絵合、松風、薄雲、朝顔、少女、玉鬘の九巻を収める。

一、本文は、青表紙本系統中の善本とされる、平安博物館所蔵の、大島雅太郎氏旧蔵本、通称大島本を底本とするが、青表紙原本の存する巻と、青表紙原本の忠実な臨写本である明融本の存する巻とは、これらを底本とする。

一、本巻に収めた諸巻の底本は、いずれも大島本である。

一、底本の本文を改めなくてはならないと考えた箇所については、他の青表紙諸本、場合によっては河内本、別本の本文によって校訂して本文を立てたが、それは最小限度必要と考えられる範囲に限った。

一、以上、底本の選択、ならびに底本の校訂に関する本書の方針については、第一巻巻末解説中の「テキストについて」「校訂について」を参照されたい。

一、本文を読みやすい形で提供するために、ある程度の統一のもとに、仮名に適宜漢字を宛て、仮名づかいは歴史的仮名づかいに改めた。漢字は現行の字体を用いた。また句読点、濁点をほどこし、そのほか、会話には「」をほどこした。

一、語の清濁についてなお問題は多いが、ほぼ『湖月抄』の清濁によった。結果として、現在通行の

濁音を清音に改めた場合が多い。「かへりごと」「からうじて」「しかじか」「まらうど」を、それぞれ「かへりこと」「からうして」「しかしか」「まらうと」とするたぐいである。

一、底本の漢字表記のうち、数詞の「五六日」「三四人」などは、「ゴロクニチ」「サンシニン」などのように音読すべきものと考えられるので、振り仮名を付けなかった。

また、月名には、たとえば「やよひ」「三月」両様の表記がある。「三月」の方は音読すべきではないかと考えられるので、こうした漢字表記も、底本の表記を尊重して、振り仮名を付けなかった。一、「大殿」「大との」については、底本の大島本には、漢字表記のほか、「おほいとん」「おほとん」両様の仮名表記が見られる。「おほとん」という読み方は漢字表記の「大殿」「大との」から派生したものではないかと考えられるので、すべて「おほいとん」に統一して、本文は「大殿^{おほいとん}」で立てた。

一、注は、傍注（色刷り）ならびに頭注による。現代語訳、人物の指示は傍注で、説明（系図を含む）は頭注で、という原則であるが、説明を付け加える必要がある場合もあり、スペースや印刷面への配慮から、頭注にまわした現代語訳もある。

一、本文には、会話の話者を（ ）で、主語その他、文脈の指示を「」によってそれぞれ色刷りで示した。

一、なお、頭注のスペースを利用して、段落のはじめに、物語の叙述内容を要約した小見出しを色刷りで掲げた。一つの巻の叙述を、どこで区切り、どう区分するかは、慎重な考慮を要する事柄であるが、今は、理解を助けるための便宜の処置としてこれを試みた。

一、それぞれの巻のはじめにその解説を載せて、理解の手引きとした。この物語全体にわたる解説は、

第一卷卷末の解説を参照されたい。

一、『源氏物語』の解説は、歴史的に見て、中世以降の注釈の歴史にその多くを負うており、本書の頭注にも、時々、古い注釈書の名が引用されることがある。また注釈の歴史をどう見るかということは、校注者の注釈の態度ともかわる問題であるので、こうした点について、第一卷卷末解説中の「注釈について」を参照して校注者の意図を汲み取っていただければ幸いである。

一、卷末に、付録として、天徳四年内裏歌合、系図、凶録を掲載した。凶録は、頭注の凶録参照の指示によって適宜参照されたい。

源氏物語 三

滯^{みきつ}

標^{くし}

この巻は、二十八歳から二十九歳にかけて、帰京後の源氏が、政權の座を固めるために、着実に布石を打ってゆく様が具体的に語られている。その中で、ご願果しの住吉詣では、住吉という歌の名所に、折から来合せた明石の上一行を配し、身分の隔たりに泣く彼女のとらえた光景を一幅の絵のように書いている。巻名「濡標」は、この段の構成に深くかわる古歌「わびぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ」に由来する。

さて、帰京後、源氏はまず父桐壺院追善の法要を営み孝養を尽した。翌年二月、冷泉院は無事即位し、源氏は内大臣に、致仕の大臣は摂政太政大臣になり、孫娘を入内させ、外戚となった。藤壺は准太上天皇の待遇をうけ、院司が設けられる。三月、明石で女子誕生。その将来に立後の予言があり、期するところの大きい源氏は、親しく乳母を選んで派遣し、紫の上にも打ち明け、五十日の祝いには立派な贈り物を届ける。秋、ご願果しの住吉詣で。明石の上も姫君ともども来合せるが、再会はかなわなかった。

六条の御息所は、齋宮退下により帰京し、病のために出家する。やがて、源氏に齋宮のことを託して死去した。源氏は齋宮を養女にして、冷泉院の後宮に納れようとするが、朱雀院もご執心である。源氏は、藤壺に諮り、彼女の力によって、朱雀院の希望を斥け、明石の姫君が成長するまでの十数年間、冷泉院の外戚として活躍すべき地位を得ることに成功する。

一 桐壺院がまざまざと夢にお現れになつてからは。明石の巻（二巻二六四頁）に、源氏がうちまどろむ夢に「故院、ただおはしましさまながら立ちたまひて」とあつた。

二 どうかして、あの時お話しの、院が苦しんでいらつしやるという罪をお源氏、桐壺院追善の法華八講を営み、朱雀院を輔佐する

と。明石の巻で、桐壺院が、「われは、位にありし時、あやまつことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふる暇なくて……」と言われたことをさす（二巻二六五頁注一〇参照）。

三 法華八講。追善法要である。（明石三〇七頁参照）弘徽殿の太后は、なお病氣が重くていらつしやる上に。太后の病のこと、明石二八六頁参照。

五 とうとう源氏を屈服させられずに終るとはと、おもしろからずお思いであつたが。

六 桐壺院が、自分の在世中に變らず、源氏を執政の臣として重んずるよう遺言したこと。（二巻賢木一三九頁参照）

七（院のご遺言に背いた結果になつたので）何か報いがあるに違ひないと思つていらつしやつたのだが、すっかりきちんとなさつて（源氏を都に呼びもどして）もと通りの地位におつけになつて。

一 さやかに見えたまひし夢の後（源氏は）は、院の帝の御ことを心にかけきこ

えたまひて、いかで、かの沈みたまふらむ罪救ひたてまつることを

せむと、おぼし嘆きけるを、かく帰したまひては、その御いそぎし

たまふ。神無月（かみなし）に御八講（ごはかう）したまふ。世の人なびきつかうまつること、

昔のやうなり。

太后（おほきさき）、なほ御なやみ重くおはしますうちに、つひにこの人をえ

消たずなりなむことと心病みおぼしけれど、帝は、院の御遺言を思

ひきこえたまふ。ものの報いありぬべくおぼしけるを、なほし立て

たまひて、御こち涼しくなむおぼしける。時々おこりなやませた

まひし御目もさはやぎたまひぬれど、おほかた世にえ長くあるまじ

う、心細きことのみ、久しからぬことをおぼしつつ、常に召しあ

一 朱雀院は、世の政治なども、一部始終ご相談なさつては、ご満足のご様子なので。桐壺院の「大小のことを隔てず、何ごとも御後見とおぼせ」（賢木一三九頁）という遺言に叶うことになるので、本望なのである。

朱雀院、讓位を決意し
臘月夜の尚侍と語る

二 臘月夜。

三 臘月夜の尚侍の父太政大臣（もとの右大臣）。明石二八六頁に、死去のことが見える。

四 頼み少なげに、ご病氣が重くなられる一方なのに。「あつい」は、「篤ゆ」（下二段）の連用形「篤え」をもとの形と考えるべきであらう。

五 あなたは、今までとは打って変わった境遇で、あとにお残りになることでしよう。強力な後見のいない状態をいう。

六 昔から、誰かより軽く見ていらつしやうたけれど。「人」は、源氏を婉曲にさす。

七 ふたたび、あなたのお望み通り、契りを結ばれるにしても。源氏と縋りを戻したにしても。

八 どうして、せめて御子だけでもお産みでなかったのでしょうか。

りて、源氏の君は参りたまふ。世の中のことなども、隔てなくのたまはせなどしつゝ、御本意のやうなれば、おほかたの世の人も、あは知らぬもののはなくうれしきことによろこびきこえける。

下りゐなむの御心づかひ近くなりぬるにも、尚侍、心細げに世を思ひ嘆きたまへる、いとあはれにおぼされけり。「大臣亡せたまひ、

大宮もたのもしげなくのみあついたまへるに、わが世残り少なきこちするになむ、いといとほしう、名残なきさまにてとまりたまは

むとすらむ。昔より人には思ひおとしたまへれど、みづからの心ざ

い愛情が身にしまつていて、あなたのことだけが、いとしく思われたのです。

しのまたなきならひに、ただ御ことのみなむ、あはれにおぼえける。

あの子以上のお人が、また御本意ありて見たまふとも、おろかならぬ心ざ

立ちまさる人、七 私ほどではあるまいと思われることも、たまらないのです

しはしも、なずらはざらむと思ふさへこそ、心苦しけれ」とて、う

ち泣きたまふ。女君、顔はいとあかくにほひて、こぼるばかりの愛

敬にて、涙もこぼれぬるを、よろづの罪忘れて、あはれにらうたし

と御覽ぜらる。「などか御子をだに持たまへるまじき。くちをしう

は、ほんとうに残念な

九 宿縁の深いあの人（源氏）のためには、そのうちお子を儲けなさるに違いないと思うにつけても、たまらないことだ。子供が生れるのは、前世からの約束事だとする当時の考え方による。

一〇 しかし、身分は越えられないから、臣下としてお育ちになるですね。臣下である源氏の子だから、の意。

一一 なるほど、源氏はすばらしい方だけれども、さほど深く自分を愛して下さってはいなかった様子や、氣持などを。

一二 あんな騒動まで引き起して。源氏との密会を父大臣に見つけられて、須磨流謫に到る政争の端緒になったことをいう。賢木巻末に詳しい。「などで」から「人の御ためさへ」までが、朧月夜の心中。

一三 ほんとうに我が身がいとわしくなってしまうわね。朧月夜の思いと草子地が一体になった文章。

翌年春、東宮元服

一四 後の冷泉院。

一五 源氏は、明石の巻（三〇五頁）で権大納言に就任。権大納言も大納言と称した。

ことだ

もあるかな。契り深き人のためには、今見出でたまひてむと思ふもくちをしや。限りあれば、ただ人にてぞ見たまはむかし」など、行く末のことをさへのためはするに、いとほかしうも悲しうもおぼ

〔朧月夜は〕

えたまふ。御容貌など、なまめかしうきよらにて、限りなき御心さ

〔朱雀院の〕かたち

優雅で

お美しくて

〔朧月夜への〕この上ない

ご愛情が時と共に深まるかのように大切にお扱いなさるので

二

しも思ひたまへらざりしけしき、心ばへなど、もの思ひ知られたまふまに、などで、わが心の若くいけなきにまかせて、さる騒ぎ

いたらなくて無知なままに

二二

をさへ引き出でて、わが名をばさらにもいはず、人の御ためさへ、

自分の評判を落したことはもとより

源氏にも迷惑をかけた

などおぼし出づるに、いと憂き御身なり。

二月

二四

明るる年のきさらぎに、春宮の御元服のことあり。十一になりた

お年のわりには大きく

大人びていらしておきれいで

一五

まへど、ほどよりおほきに、おとなしうきよらにて、ただ源氏の大納言の御顔を二つにうつしたらむやうに見えたまふ。いとまばゆき

もう一つに移し替えたかのように

〔お二人が〕

まで光りあひたまへるを、世人めでたきものに聞てゆれど、母宮は、

互いに輝くお美しさなのを

よほどすばらしいこととお嘆仰すけれども

藤壺

全くだまされぬ思いで、いみじうかたはらいいたきことに、あいなく御心を尽くしたまふ。内

どうにもならぬことにお心を痛めになる

一 (一國の天子ではないので) 何の榮えもない身ではあつても。

二 東宮には承香殿の女御のお産みになった皇子がおつきになった。「承香殿の皇子」の

ことは、「當代の御子」は、右大臣

の女、承香殿の女御の御腹に男御

子生まれたまへる、二つになりたまへば、いといはけ

なし」(明石二九五頁)とあつた。

三 令外の官で、必要に応じて置かれた。職掌は左右大臣に同じ。一条天皇頃から、実権を握る外戚が任じられ、摂政関白になる例があらわれた。

四 左右大臣の定員(各一人)が決つていて。

五 源氏の舅、左大臣。桐壺院崩御後、致仕の表を奉つて、自邸に引き籠つていた。(賢木一七九頁参照)

六 天皇が幼少の時、代つてすべての政治を執る役。

七 官職も辞退申し上げていたのに、「位」は、當時は官位相当なので、官(役職)を辞したことをも、こ

ういたのであろう。左大臣は二位相当。

八 異国でも、事變が起り世の中が乱れている時には、政界を退き深山に籠つてしまつた人でさえ、太平

の世になれば、白髪しらげの身も恥ぢず、出て来て天子にお仕えする、そういう人をこそ、眞の聖賢とはしたものだ。聖賢は儒教における理想的な人物。漢の高祖の時、

商山に隠棲し、高祖の召しにも応じなかつた四皓(東園公、角里先生、綺里季、夏黃公の四人の賢人)が皇

太子(後の孝惠帝)の輔佐として出仕した故事がある。

ち帝も「東宮を」ご立派だと思ひ申し上げなさつて裏にもめでたしと見たてまつりたまひて、世の中ゆづりきこえたまふべきことなど、なつかしう聞こえ知らせたまふ。

二月 同じ月の二十余日、御国ゆづりのこと、にはかなければ、太后おぼ

しあわてたり。「かひなきさまながらも、心のどかに御覽ぜらるべ

きことを思ふなり」とぞ、聞こえなぐさめたまひける。坊には承香

殿の皇子みこゐたまひぬ。世の中あらたまりて、引きかへめかしきこ

なことが多かつた。源氏の大納言、内大臣になりたまひぬ。数定まりて、

欠員けいゐんがなかつたのでくつろぐ所もなかりければ、加はりたまふなりけり。やがて世のま

つりごとをししたまふべきなれど、「さやうのことしげき職には堪へ

ずなむ」とて、致仕ちしの大臣、摂政せつせいしたまふべきよし、ゆづりきこえ

たまふ。「病やまひによりて、位を返したてまつりてしを、いよいよ老の

者ものが加わつて、さかしきことはべらじ」と、うけひき申したまはず。

人の国にも、こと移り世の中定まらぬをりは深き山に跡あとを絶えたる

人だにも、をさまれる世には、白髪しらかみも恥ぢず出で仕へけるをこそ、